
魔術師ソクラテス

spring

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師ソクラテス

【Nコード】

N1761J

【作者名】

spring

【あらすじ】

どこにでもある魔術学院。そこに赴任した元軍人の葉山晋太郎の苦難の日々。彼は無事に、『先生』になれるのだろうか。

あー、結構長いです。五話ごとに携帯用簡易版上げるので、長いのが苦手な人はそちらで見てくださいれば幸いです。

ようこそ月影女学院へ（前書き）

かなり長いです（汗 一話以降は短くする予定です。これりゃキツイ、と思ったら簡易版を待って下さい。

よつこそ月影女学院へ

くくプロローグくく。

私を知る全ては、何も知らざることなり。

『ソクラテス』。

我々人類は、とある時、魔術の歴史に終止符を打った。

政治を苛む毒虫を、もしくはは虐げる為の羊を求めて。もしくは、純然なる世界の流れの一環として。

だが、我々の住む世界の常識は、どうやらもう一度終止符を打つ時がきたらしい。

世界に、もう一度革命が起こるだろう。我々の考えていた常識をもう一度土台から作りなおさなければならぬのだから。

その後の事は予想し難い。

ただ、私が、読者に確信を持って言える事がある。

君が知っている全ては、君が何も知らないと教えているに過ぎない。

『十三人目の訪問者』 本文

一章より抜粋

灰色の雲が巨大な天幕を張って、太陽を完全に隠してしまっていた。

ずっと、地平線まで続いていそうな平坦な二車線の一本道が左右を雑木林に囲まれながら、無造作に置かれている、そんな場所。

人気もないそんな場所で、ただ黙々と歩くだけ、というのは予想以上に精神にくるものがあった。歩き出して、早、一時間。

俺は、このまま歩き続けるか、それとも全てを忘れてタバコを吸って休憩するか、という誘惑の間で、半ば本気で揺れていた。

葉山 晋太郎、二十七歳、独身。中央の学校を小中高大とエスカレーター式で進級、進学。

その後、……………そんなことはどうでもいい。

調子が狂う。どうも、無駄な想像や回想が頭の中で幅を広げる。

俺は、自分の胸元を眺めた。黒光りする髑髏のネックレスが何時の間にか己の上がった体温で熱を籠らせていた。銀色の細かいチエーンに、重厚にニスで塗装された髑髏を模った金属のミニチュアが文句を言いたげに、ゆらゆらと揺れた。

マジックアイテム、俗に言う魔導具というやつだ。

ただし魔導具という言葉は間違いではないが、俺のような人種は嫌って使わない。元々、昭和時代に無難に造られた造語であって、正しい訳ではないからだ。

俺のような人種であつて、俺個人のこだわりはない。好きに呼べばいいと思うけどな。

これは、黒曜石で出来た儀礼用のマジックアイテムだ。黒曜石はテスカポリトカの伝承のように意志や五感を込める触媒として高い性能がある。

特に骸骨は、人の器を模しているため形も重要な魔術の一つだ。ただの悪趣味なアクセサリーではない。

一般人に販売されているような人工知能の精霊ではなく、それなりに強力な奴だ。魔術師らしく。

俺のは『使い魔』だ。ただし寝ている。

先程、暇すぎる、といつて勝手に昼寝を始めてしまった。全く従順ではない使い魔だ。通常、使い魔が主人の命令を聞かずに行動する事は有り得ない。

まして、主人がこうして肉体的精神的に疲労している時に自分一人で惰眠を貪る使い魔など、絶対に有り得ない。

大事な事なので二度言つが、絶対に有り得ないぞ。

しかも、俺は魔術師だ。

ソーサリー魔術師、ではなく、真正銘、国に認証してもらいライセンスも取得している。

そう、俺は魔術師なのだ。

その俺が。

何故、肉体労働に従事せねばならないのだろうか。

俺の不满メーターは殆んど振り切れ寸前、額に血管が浮き出ていてもおかしくはない。

針がぎりぎり留まっているのは、もう少しすれば、俺が行きたい場所へ辿り着けるからだ。

今時、交通機関の殆んどが、魔道機関の恩恵に預かれるというのに旧時代運搬機（ガソリン式モーター車）すらないなんて、どうなってるんだらうな？

『日本』つてのは、旧時代のこの州の名前だ。その時代の呼び方をするならば、ここは『東京』の『三宅島』という島で、筭で一時間程度の沖合いにある半径八キロ程度の小さな島だ。

『統合政府』はここを『スピカ』と呼称し、また俺らもそう呼ぶ。スピカ（最先端）とは名ばかりで見渡す限り、木、木、木の明らかな未開拓地。旧世代然とした二車線の道路だけがひたすら島の東端に、まっすぐ伸びている。島内での筭の類は一切禁止らしく、俺は島に来るや否や自前の筭を回収されるという憂き目にあってかなり気分を害した上に、数キロ徒歩というこの仕打ち。

もちろん、迎えの車などあるわけもなく。

……俺は、恨まれてもしてんのか、と、疑いたくもなる。

歩くのには慣れてるので、苦にはならないものの、酷く釈然としない気持ちに俺は成らざるを得ない。感謝すべきことは重い荷物の類（といっても俺はそんなものほとんどないわけだが）事前に運んでくれた事だけ。

歩く。

ひたすらに歩く。

「……………」

さつきから、俺はとある衝動に駆られていた。

ようは、一本、タバコ吸いたいた的な気持ちになっている。

だが、正直に言って時間はない。その理由の大半は俺の筭が没収された事による時速の大幅ダウンという至極真つ当な内容なのだが、時間がない事には変わりない。

何の時間か？

俺の初出勤の時間までだ。

「まあ……………いいか」

勤労精神の低い俺は、近くの木の下に寄りかかった。

もういい、遅刻してやる。俺はタバコに火を付ける事にした。

指だけで。

術式なんて適当だ。基本四大でも五行でも、神話体系でも何でもいい。たかだが、4「7（プロセファール）程度の魔術師に魔術の国籍なんておこがましい。

ぼつと、指先の炎でタバコに火を付ける。

落ち着く、これから行く場所を考えるとオチオチタバコも吸えないような状況も十分に考えられるので、今のうちに堪能しておくに越したことは無い。

にしても、俺が、定職になんて付くとはな。不意につき最近までの自分を思い出して、少し笑う。

想像もしなかった。こんな自分の姿がさがさつ。

突然、隣の茂みが風も無いのに揺れた。一瞬、熊か、と思ったが、当たり前だがこんな島に熊はいない。

「ぶつはあ」
茂みから豪快に、ぼぼつ、と顔を出したのは、茶髪の女の子だった。

「やー、葉っぱが一杯ついちゃったよー」
少女は、枝を掻き分けて公道に出た。黒っぽいローブに、魔女の尖がりハットを脱いで手に持っている姿。帽子は恐らく茂みの中では被っていらなかったのだろうが、そもそも、何でこんな場所にいるのだろうか。俺は疑問を抱かずにはいられない。

シヨートの茶髪で軽くパーマな身長百六十前後の日本人（推定）少女は、俺に気が付いていないのか、自分の服に付いた葉を一生懸命取っている。頭に葉っぱが乗っている事を教えるべきだろうか。しょうがねえな。俺はひそかに構えていた杖を、こつそりびびったわけじゃないしまい、少女に言っただけでやった。

「おい、ガキ、頭に葉っぱついてんぞ」

「あ、本当だ。ども、ありがとうございます」

少女はこつちを見て、ぺこりと頭を下げた。

「……………?」

「……………なんだよ」

目が合った。じつとこちらを見ている。

せつかくだし、自己紹介しておくか。

「あー、俺は今日からこっちに配属された葉山 晋太郎だ。よろしく」

「あ、……………あたしは」

少女もつられて名乗ろうとしたのか口を開け、そしてはっとした顔になった。自分の持ったビニール袋にさっと視線を向けて、それから俺に再び視線を向けた。
なんだ一体。

「……………あの、あたしの事、見ました？」
は？

「意図が分からんが多分見たと思う」

「……………だよね」

少女は、顔を真っ青にして俺を上目遣いに見た。うつむいてる、とも言う。可愛い顔つきの少女だが、明らかに落ち込んだ視線を向けられると、俺でも戸惑う。

意味が分からないが、どうも落ち込んでいるらしい。

俺に見られたから？

……………初めて知ったが、俺が見つめるだけで異性は著しく気分を害するらしい。

知りたくない衝撃の事実。

なるべく一生知らないままでいたかった。それとも、この少女だけが特別なのか。とりあえずまだそっちの方がいいが、どちらにせよ気分が最悪になる事は否めない。

というか、そんなわけあるか。

「あ、あの」

「ん？」

「……………、もしかして新しい先生、ですか」

先生。……………なんかくすぐつたいな。ガラじゃないっていうか。

「 だったら? 」

「 どうか私を見逃してくださいお願いしますお代官様
! 」

「? 」

オダイカンサマって、なんだ?

どうもこの「州」を離れて長いせいか、こっちの文化がよくわからん。どうやら偉い人物らしいが。正直に言うべきだろうか。

「 」まあいいか。

「 あたしを待っている幼い子供と、病気の夫が! 」

「 それは嘘だろ 」

「 でも待つてるのは本当なんです! 」

俺はタバコをたゆらせた。

っていうか、そもそもこの子が誰で、何したのか俺には分からないんだがな。まあ、前者は予想つくけど。俺は頭に葉っぱを乗っけながら真剣にこっちを見ている少女に苦笑しつつ、頭の葉っぱをどけてやった。

「 あ 」

「 いや、葉っぱがね 」

「 あ、ありがとございます 」

戸惑っている少女に俺は言った。

「 いいよ別に 」

少女は目を丸くした。

「ほんとに? 」

ああ、 どうでも。

「 つまり、俺は誰とも会わなかった。それでいいんだろ 」

深く踏み入っても、面倒なだけだしな。俺は真面目な“教師”になるつもりなんてこれっぽっちもない。好きにすればいいんだ。別に。あータバコうまい。

どう解釈したかは知らないがぱっと少女は顔を明るくした。

「 どうもありがとー! 」

ええっと 「 」

「葉山 晋太郎」

「ありがとう！ シンタロー先生！」

少女は俺の手を掴むとぶんぶんと上下に振って満面の笑みを浮かべた。

良く見れば、ローブの中は薄緑のブレザーにシャツ。学院の制服だ。

「本当にありがとうっ。すっ　　ごくっ感謝してますっ！ 感謝感激雨あられ」

「わはった。わはったから」

俺は揺さぶられて啞えたタバコが口の中で縦横無尽に動き回るのを必死に止めた。

「あ！ ごめんなさい！」

「……」

「じゃあ、あたし行きます。先生も早く行った方がいいよっ！」

「………　　そっいや、お前、名前は何ていうんだ」

「名前？」

俺の言葉を聞いて少女は、何故か悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

「あー、《学院》で会った時に言います」

「？」

「だって次が？初対面？じゃないですか！」

少女は、いきなり現れたように、あっという間に反対車線の茂みに消えていった。獣のような奴だ。

俺は少しだけ、笑った。結局、何をしてたのか聞けなかったな。

「ん？ ……………　　時間？」

俺は、視線を左腕に落とした。

「…………げ」

時刻は丁度、八時を指していた。

「……………　　完全に遅刻だなこりゃ」

俺は、また笑った。たぶん今度は苦笑いになっていた。

結局、俺が目的地と思しき場所に着いたのは八時から十分後だった。車線は突然開けた場所にたどり着く。そこは茶色の石畳の半円状の広場だった。目の前には巨大な門と、二対の悪魔の像。円柱状の柱の上に鎮座する悪魔はじつと来客者を睨んでいるようにも見える。悪魔つてのは昔は悪いイメージがあるが、西洋のガーゴイルとかは日本の鬼瓦みたいなもので、逆にありがたい代物で全然問題ないのだが、物々しい雰囲気は否めない。その横は完全に塀で覆われ、中の様子は伺えない。門の脇には小さな駐車場があつて、いくつか古いが品のいい自家用車が並んでいる。流石に凄いな。ここは。

塀の向こうに行かなくちゃいけないんだけどどうやって入れればいいのだろうか。

やっぱり、遅刻したのはマズかったろうか。いやマズいだろっけど。

俺は『月影女学院』と彫られた門の周りをうろつろと探索してみる。インターホンとかはないのか。

「……………しかし、流石にでかいな……………」

俺は巨大な門に圧倒されるように上を見上げた。俺の身長のは倍はありそうな大きな門。俺はこれからこんな所で、やっていくのか。

ふと、俺は門に彫られた文字に目が行った。学のある人間がやりそうな、横文字の羅列。門のエンタブレチャー（正面上の部分）にお洒落な感じに、そつと添えてある。

妙に、俺はそれが気になって目で追った。

「……………これは」

どこかで見たとような言葉。どこか、懐かしい。

「True wisdom comes to each of us when we realize how little we understand about life,

ourselves, and the world around us.

Socrates」

かるやかな、淀みのない流暢な発音に俺は聞き惚れ、しばし呆然とした。それが、自分の背後から聞こえた声だと気がついて、振り向くのに不覚にも数秒かかってしまった。

ざざあ。いつの間にか、天気は晴れて、太陽の光が雲の隙間からゆっくりと地面を照らし、まるで照らし合わせたかのように、レンガに染み渡っていく。イチヨウの葉が、舞い上がり、世界を彩る。

まるで、気配を感じなかった。

彼女は、まるで初めからそこに居たかのような自然さで、当たり前のようにこちらを見ていた。

「初めまして。理事長補佐をしております。フランジェリカ、と申します」

完璧な日本語だった。

それよりも特記すべきは、彼女の、フランジェリカと名乗る彼女の格好だった。

メイド服だ。

白と青のモブキャップに、黒を基調としたパフスリーブの服にフリルをふんだんに使った黒いレースのスカート。そして白い手袋と白いエプロン。メイドだ。完璧なメイドがここにいる……！俺は何故だか強い衝撃を頭に受けた。どうも上位の存在が俺という媒介を用いて語りたがっているかのようだ。……いかなん少し混乱したようだ。

染めた金髪ではなく、恐らく純粹な金色の髪を後ろでモブキャップで束ねて、じつとこちらを見る碧眼の相貌。

「私が知っている事は、私が何も知らないという事だ」

「……？」

「その碑文の内容でございます。ここで何かを学ぶ者は、自分に驕ることなかれ、という戒めに基づいて刻まれたものです。……

…じつと眺めていらしゃったので。差し出がましいまねでしたか？」

「いや、……………ありがとう」

確か、有名な哲学者の言葉だったな。成るほど、こじやれた人間の書きそうな事だ。

「あー……………初めまして、ミス・フランジェリカ。俺はシンタロウ・ハヤマ」

「はい」

つい『向こう』に居たクセで俺が差し出した手をフランジェリカは握った。手袋越しにも分かるひんやりとした冷たい手だった。

フランジェリカは冷たい目で俺を見ていた。

しまった。こっちだと、呼び捨ては失礼だったか。

「あー、えっと、フランジェリカ、さん？」

「はい」

彼女はことさら冷たい目をしている、ように見える。

俺は何を言っているかわからないか、考えあぐねた。もしかして、俺が遅刻した事を責めてるのだろうか。うーむ。

「……………申し訳ありません」

「へ？」

彼女はぺこり、と俺に頭を下げた。

「私はどうも笑う事が苦手なのです。どうか、私の事はお気になさらないで下さい。誤解なされないよう最初に初対面の方にはそう伝えるように理事長から仰せつかっておりますので」

そう言って、顔を上げたフランジェリカ、さんはやっぱり無機質染みた表情をしている。

いや、見方によっては申し訳なさそうに見えなくもない。

「私の事は気軽にフランと呼んでくださって構いません。学院の方は皆、そう呼んで下さいますので」

「じゃあ、遠慮なく……………」

俺も、敬称付けで呼ぶのが苦手だし、好意に預かるう。彼女は、表情は変わらないまま、もう一度ぺこりと頭を下げた。

「では、案内しますが何か質問がありますか」

俺は押し黙った。というよりも、さつきから突っ込むか突っ込まないべきか、考えてる事が一つあった。

「フランは、理事長補佐、なんだよな」

「はい」

「……………だったらさ」

「はい」

「何で、メイド服なんだ」

「……………えっと」

彼女は何故か小首を傾げた。

一秒、二秒、時間がたつ。彼女は、困惑した（ように見えなくもない）表情で、じっと考え込んでいる。何だが、ちょっと愛嬌がある。

やがて、ぽつりと呟いた。

「……………趣味、です？」

「……………そうか」

「質問は他にはありませんか」

「……………ああ」

ないな。なにも。俺は何故か満足感いっぱいだった。

「それでは……………少し待って下さい」

「??」

彼女は俺の前に立つと、スカートの前で腕を組んで丁寧なお辞儀をした。

そして上げた顔は、やはり無表情だったが、勘違いかもしれないがどこか微笑んでいる顔に、見えなくもなかった。

「ようこそ、月影女学院分校へ」

よつこそ月影女学院へ（後書き）

読んで下さりありがとうございます。次は短めにするので読んで欲しいです。

二話目（前書き）

長いです。前回よりは短いです

二話目

ッ！！

「……………っは！」

目を覚ますと、見知らぬ天井を見上げていた。

「……………ああ、そうだった。うげ、気持ち悪い」

ここは、寮の一室だった。体を起こすと、汗でじっとり濡れていた。酷く気持ちが悪い。

なにか嫌な夢を見た気がする。しかし内容は忘れてしまった。

俺は、ぼーっとする頭を揺さぶって起こす。時間は、……………ぴったり六時。この生活リズムだけは崩れない。

起き上がって辺りを見渡す。まったく片付いた様子のない見慣れない家具の数々。多い尽くされた前任者の荷物に追いやられるようにして隅っこで固まっている俺の荷物達。

全然片付いていない。

というよりも、何でこんなに汚れてるんだっただか。

「……………思い出した」

ああ、思い出したとも。

昨日会った、どいつもこいつも糞ガキな奴らの事を。思い出して、ゲンナリした。

昨日の出来事を様々と思い出して、俺はさっそくため息を付きたくなった。

ため息は好きじゃない。だから、付かない為にも、タバコが吸おうとポケットに手を伸ばす。

空回りする指。

「ッ！ んッ！ ないだと！ 馬鹿な！」

焦る俺。

『校内では禁煙だ愚か者ッ！』

……ああ、これも思い出した……。まあ、いいけど、俺が持ってきたトランクの中にまだまだストックあるし。って、俺のトランクが勝手に空いてる、
タバコが根こそぎ持っていかれてるだろ!?

「……………あのガキか。ふざけやがって……………」
くそ。

俺、こんな学校でやっていけないのか……………?

かつて日本と呼ばれた第二十八番州は世界有数で魔術的資源の豊富な地区だと言われている。主に、固有文化による魔術論理は歴史構造共に単一民族特有の優秀さと言えるが、もっとも優秀とされるのは、その人材だ。

かつての国民思想に根付く、柔軟な魔術文化が、優秀な魔術師を数多く輩出してきた。

『月影女学院』もその一つの結果だ。

今や一大財閥の一つの《陰陽グループ》を元とする、二十八番州には魔術師教育機関が多数存在するが魔術師の才能は、環境よりも、
遺伝子の方が影響がある。

よってその待遇は血筋によって左右される。
より、高い血統がより良い環境に置かれる。それが、魔術師、という職種の実態と言える。

『月影女学院』とは一定以上の才能を持つ生徒が集まる言わば州内有数の名門校であり、その権威は例え『分校』であろうとも衰えるような事はない。

「私が月影女学院分校の理事長の陰陽おんみょう 御木代みきよだ。何か文句があ

るか」

「……………文句というよりも」

「黙れ庶民」

さっそく、理事長の部屋に通された俺は、間を入れずに黒い椅子の上で踏ん反りかえるガキに、威喝された。

「黙っておれ一般庶子。お前の言うことなど高が知れるわアホ、どいつもこいつも似たようなりアクション取りおって。こっちは初対面の度に同じ反応何度も受けてそろそろイライラしておる。貴様の質問に答えるつもりはない。いいな」

なんだこの糞ガキは。

執務室（と書いてあった部屋）に入るや否や、俺は身長が恐らく百四十もないチビガキに偉そうな口を叩かれていた。猫みたいなの吊り上った目をしたガキで、どう見ても学院の制服を着ているが、どうも 理事長を名乗っているらしい。アホか。

俺が呆れて後ろを振り返ると、フランが、こっちを見返して、何故か頭を下げた。……………どうやら本当らしかった。

なんの冗談だこれは。

「返事が聞こえん」

腰まで届きそうな純粹に深い黒色の長い髪を揺らしながら、少女が俺を睨んだ。本当にガキにしか見えないんだがな。

「……………うす」

「よろしい。では、もう一度名乗るが、私が月影女学院分校の『理事長』ツ！ の陰陽 御木代だ。よろしいかな一般庶子」

しつけえな。

「ああ」

「よろしい。では、質問だが、君はどうも勘違いをしているようだが、初任は八時以内にくるよう、私は通達した筈だが、予定時間を大幅に過ぎているのはどうしてかな？ 私としてこれだけで君の評価を下げるに値すると思うが、一応弁明を聞こうか。ん？」

「……………簿が回収されるとは思わなくてな。七時にここについて

から歩いてきたんだ」

「ほう」

理事長（と名乗るガキ）は、目を細めた。

「悪いがここでは許可なく箒を飛ばす事は出来ない」

「どうして」

「生徒を逃がさない為にだ」

理事長は当たり前のように告げた。

「なんだって？」

理事長は酷く、面倒くさそうな顔で言った。

「防犯上の理由だ。生徒が箒をもって自由に行動するのは問題があるだろうが。後、貴様、私には敬語を使え」

「分かりましたよ理事長」

「ふん。まあいい。とにかく学院では許可なく箒を飛ばす事は出来ない。あの厳重な警備を見れば分かるだろうが、勝手な外出も一切許可してない」

「……………」

俺は、あの校門での検査を思い出した。血液から指紋、魔力の波長まで測られた。あの厳重な警備を、まるで檻のようだ、と思ったがあながち間違いでもなかったらしい。

結局あの大きな門も防犯上の都合とかで実際には使用していないとかで隣の駐車場の奥にあった警備員常備の小門から学園に入った、という経緯もある。

「ここは資産家の子女も多い。警備が厳重なのは彼女らの親の希望たつてのことだ。わかるか」

「ええ」

頷いて置く。そういえばあの森であった少女は学院の制服を着ていた。だが、学院に許可を取って出歩いているようには見えなかった。

ではどうやって？

悪い事をしているようには見えなかったが、わざわざあんな警備

の中抜け出して、森で何をしていたのだろうか。

「どうした？ キツネにつままれたような顔しおって。……森で学院生にでも会ったのか」

「別になにも。そこまで嚴重にする意味が分からないだけです」
理事長は、特に疑いも持たなかったようで、ふん、と鼻を鳴らしただけだった。

「好きに解釈するがいい。……そうだ、貴様、嘘はいかな」
まさか勘ぐられた？ 俺が？

「嘘って何がです」
気取られたとは思えないが。

理事長は意地悪げに口元を歪めた。

まさか、意外と鋭いのか、コイツは。

「……湾岸からここまで七キロはある。そのスーツケースを持って歩いて一時間でやって来れる距離ではないだろう？ まさか、箒を隠し持っているわけではあるまいな」
そうでもなかった。

「……いや、俺は普通に徒歩でしたが」

理事長は怪訝な顔をしたが、俺の拍子抜けした顔を見て、何かを思い出したらしく、一人頷いた。

「む、そうか、貴様、元軍人だったな」

「……まあな」

「敬語」

「そうでございます」

「ぐっ」

理事長はむっとした顔をした。

「貴様はどうも軍では教わらなかったようだ、上司に対する態度というものを。今からでも私が徹底的に……」

そう言っただけで理事長は机から杖らしきものを取り出そうとした。

「みきよ様。申し訳ありませんが、お時間が」

後ろで控えていたフランジェリカが、静かに告げた。

「つち……」

残念そうに舌打ちをする理事長。

「まあいいだろう。本題に移る。あー、葉山 晋太郎。今日よりお前を月影女学院分校の魔道基礎科を担当してもらうが、問題はないな」

「ああ」

「私から、葉山教員に言える事は二つだ。よく聞け」

理事長は黒皮の椅子から降りて、俺の前に立った。身長之差から自然と俺が見下ろす形となる。黒い双眸から射抜くような視線で俺を見ていた。先ほどとは違う、一応真面目な表情。

「まず一つ。絶対に生徒に手を出すな」

「……………は？」

「そして二つ目だ」

理事長の言葉に呆気に取られた俺は、俺の胸ポケットに伸びる理事長の指を見た。殺意とかがないので、俺の体はつい、反応を忘れてしまった。

彼女が抜き取ったのは、俺のタバコ。長方形の四角い箱とその中身。

ぐしゃり。タバコが握りつぶされた音。

「な、て、てめえ」

「私はな、タバコがだいっつっ嫌いだっ」

彼女の手が真っ赤に燃え、明るい部屋をさらに一段煌々と照らす。ぶしゅう、と蒸気が抜ける間抜けな音と共に理事長が握った無様に潰れたタバコの箱はあつという間もなく炭化し、黒い塊と化し、そして理事長はそれを俺の目の前で、ゴミ箱に、投げ捨てた。

な、なんて事を。あの中にはまだ半分以上タバコが残っていたというのに！

「俺のタバコに何してんだ！」

「校内は禁煙だッ！ 愚か者ッ！」

二話目（後書き）

読了感謝。あー、だんだんスムーズになるのでまた読んで欲しいです。主要キャラがまだあんまり出ていません（汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761j/>

魔術師ソクラテス

2010年10月10日01時32分発行